



NPO 法人 ラムサール・ネットワーク日本

絶滅危惧種ヘラシギ ロシアの繁殖地からの 人工孵化個体の渡来確認 2例に 国際的な保護活動の成果 日本にも波及の兆候



- ・極東ロシアの北極海沿岸で繁殖する絶滅危惧種ヘラシギは、嘴の先がスプーン状をしたユニークなシギ科の渡り鳥で、渡り経路全体での環境破壊や狩猟などによって近年激減しており、絶滅回避は時間とのたたかいと考えられます。
- ・保護活動の一環として国際的な連携のもとに行われているヘッド・スターティング・プロジェクト（次頁囲み参照）によって、ロシアの繁殖地での人工孵化の取り組みで巣立った個体の、カラーフラッグ（次頁囲み参照）の観察による日本での渡来確認が、2015年9月北海道伊達市、2016年4月大阪府泉大津市と2年連続、2例になりました。これは鳥類標識調査の一環として、山階鳥類研究所に寄せられた観察記録から明らかになったものです。
- ・ヘラシギは、1990年代以前はほぼ毎年渡りの時期に日本のどこかで観察され、年2桁の記録がありましたが、2000年以降、記録が減少し、観察されない年も珍しくありませんでした。2年連続のフラッグ付き個体の確認は、国際的なチームによる保護活動の成果が、日本にも及んできた兆候と考えられます。
- ・ヘラシギをはじめとして、多くの国の湿地を順に経由して渡りを行うシギ・チドリ類の保全のため、今後もカラーフラッグなどによる移動データの蓄積が必要です。また、東アジア諸国の経済発展に伴って、今後いっそう、繁殖地と渡り経路全体にわたる生息環境の保全が重要になるでしょう。



図は、ヘッド・スターティング・プロジェクト（囲み解参照）によってロシアで人工孵化され、日本で撮影されたヘラシギの個体とその移動。この2羽はいずれも、メイニピリギノで卵を採集し、孵卵器で孵化させて、ある程度育ったところで放鳥された個体です。

【右】2015年9月4日に北海道伊達市網代（あじろ）町気門別（きもんべつ）川河口で観察撮影された個体は、2015年7月11日にロシア共和国チュコト自治管区南部のメイニピリギノでフラッグと足環を装着して放鳥されたものであることがわかった。人工孵化した同じ年の秋に越冬地への南下の途中で観察撮影された。右足にV6という刻印の入ったフラッグが見える。

【左】2016年4月13日に、大阪府泉大津市の海岸部で観察撮影された個体は、2013年7月25日にやはり同じメイニピリギノで放鳥された個体だった。2016年4月に泉大津市で撮影された雄個体とその移動。2013年7月に人工孵化され、2015年1月には中国広東省で観察された。その後同年6～7月には出生地のメイニピリギノでつがいを作り産卵まで確認されたが繁殖は失敗していた。泉大津は越冬地から北上の途上で通過したと考えられる。右足にMAと刻印の入ったフラッグが見える。

※実線の矢印は、短期間回収（移動の期間に繁殖期も越冬期も経過していない）を、点線の矢印は、短期間回収以外（移動の期間に1回以上の繁殖期または越冬期を経過したもの）を示す。

ヘラシギと

ヘッド・スターティング・プロジェクト

ヘッド・スターティング・プロジェクトは東アジア・オーストラリア地域の渡り経路にあたる各国や国際的な保護団体が関わって行っているヘラシギの保全対策の一環として、ロシアの繁殖地で行われている人工孵化のプロジェクトのことで、

ヘラシギはスズメほどの大きさで、嘴の先がスプーンの形をした、東アジアだけに分布するシギ科の渡り鳥で、環境省レッドリスト（2012年）と国際自然保護連合のレッドリストで絶滅危惧IA類に位置づけられています。ロシア極東地方の北極海沿岸のツンドラで繁殖し、朝鮮半島や中国の湿地を経由して、中国南部、インドシナ半島、バングラデシュの沿岸で越冬します。

従来から減少が危惧されていましたが、渡りの中継地や越冬地を中心とした生息地の開発や狩猟などによって、2000年代に入って減少が急加速し、2010年代には推定繁殖つがい数は推定で35～140つがいほどとなり、2020年には絶滅するとの予測も出されました。

こういった状況の中、英国水禽湿地協会やロシアの鳥類研究者らを中心に、東アジア・オーストラリア地域の渡り経路にあたる各国や国際的な保護団体もかかわって、渡りの中継地、越冬地での環境保全や密猟対策や、イギリスの施設での人工繁殖が行われており、平行して繁殖地での保護活動が進められています。繁殖地では、卵と日齢の若いヒナが捕食動物に捕食される割合が極めて高く、個体数回復の障害となっていることから、産卵された卵を採集し、孵卵器で孵化させて、ある程度育ったところで放鳥して捕食を回避する対策が取られており、大きな成果をあげています。繁殖地でのこの活動が、ヘッド・スターティング（＝有利なスタート）・プロジェクトです。

カラーフラッグ（フラッグ）

渡り経路を調べるためにシギ・チドリ類などの脚に装着するプラスチック製の「旗」。場所ごとに色の組み合わせを変えて使われ、ヘラシギの例では文字や数字も刻印されており、双眼鏡や望遠鏡による観察でどこから飛来したかを確認できます。鳥の体に負担にならない形状と重量に設計されています。

※このプレスリリースに使用した写真のデジタルデータをご希望の方は下記までご連絡ください。

本件についての問い合わせ先

（公財）山階鳥類研究所 保全研究室 茂田

広報主任 平岡

Tel: 04-7182-1101 FAX: 04-7182-1106